

フィールドワークが大学生の学業及び大学への適応に与える影響について

藪 田 弘 美

美作大学・美作大学短期大学部紀要（通巻第65号抜刷）

フィールドワークが大学生の学業及び 大学への適応に与える影響について¹⁾

Effects of Fieldworks on University Students' Learning and Adaptation to Campus Life

藪 田 弘 美

Outline: This study aims to clarify significance in university students' academic activities and their sense of purpose, and examine correlation between their overall adaption to campus life and academic skills through field works (nature experience activities with infant children). In the study, the three items were surveyed as mentioned below. In Survey 1, a questionnaire targeting students who had participated in a field work and those who hadn't was conducted for the purpose of numerically quantifying the difference in their senses of adaption to the school life and willingness to learn. In Survey 2, semi-structured interviews were conducted and the review sheets distributed for the students to fill in, in order to consider the change in their perception toward participation in a field work and its subsequent change in their life as a university student, and identify the relevant qualitative changes. In Survey 3, un-structured interviews were implemented targeting third parties and observations made by the episode method to summarize the students' attitudes and approaches toward the children. The surveys indicate that the opportunities to learn through actual experiences increase the students' motivation toward academic activities in the university and have positive effects on their adaption to the whole college life.

Keyword: field work, nature experience activity, university student, adaptability

キーワード：フィールドワーク・自然体験活動・大学生・適応力

1. 研究の背景と目的

本研究では、フィールドワーク（幼児との自然体験活動）を行い、大学生の学業の意義と目的意識、大学生活全体への適応およびアカデミックスキルズの変化について考察することを目的とする。現代社会においては、核家族化や少子化、地域における人間関係の希薄化等により、幼少期から人との関わりや実体験の機会が乏しくなっている。その結果として「人との付き合いが苦手」、「無気力」などの心の問題を抱えている学生が増えているといわれる。例えば、田中・菅(2009)

は、大学生における大学生生活不適応の増加を指摘している。1970年代後半から80年代にかけて盛んに指摘された大量留年やスチューデント・アパシーといった大学生特有の問題に加え、不登校を中心とする不適応状態が大学生にまで拡大しているといっている。大学に進学する学生は多様化しており、学習目的が明確でなく、大学での学びに必要な学習態度が形成できていない学生の存在も指摘されている。こうした背景から、学生生活を能動的に送れず、十分に目的を達成できないまま学修を終えたり、不登校、休・退学をする学生

が増えたりという問題も少なからず生じている。

そのような学生の背景には、学ぼうという意思はあっても自学自習や座学のみでは学習内容を理解できず、学業に前向きに取り組めないということがあると考えられる。こうした学生に対し、フィールドワークの中で他者とともに実体験を通して学ぶ機会を提供することや、具体的な体験の中で座学の知識がどのように活用できるのかを学ぶことは、大学における学業への動機づけを高め、ひいては大学生活全体への適応にもポジティブな影響をもたらすと考えられる。

本研究の具体的な研究課題は以下3点である。

- ①フィールドワーク（幼児との自然体験活動）を通して、大学生の学業の意義と目的意識を明らかにする。
- ②フィールドワーク（幼児との自然体験活動）を通して、アカデミックスキルズと生活スキル（汎用能力）がどのように変化するのかについても明らかにする。

本研究では、生活スキル（汎用能力）を、Brooks (1984) の提案した対人コミュニケーション能力・人間関係スキル・問題解決能力・意思決定スキル・人生の目的スキルを定義とする。また、アカデミックスキルズとは、私学高等教育研究所 (2003) の大学の勉学に必要な論理的な思考力、表現力、情報収集能力などの基礎能力の育成と定義する。

II. 研究の方法

(1) 調査対象と期間

X大学の4年生8名、21~22歳（男：4名 女：4名）、3年生25名、20~21歳（男：3名 女：22名）を対象に、2017年9月~2018年2月まで調査した。このうち、フィールドワーク経験者は、大学4年生8名、3年生11名、フィールドワーク未経験者は3年生14名である。

(2) 調査方法

本研究では、質問紙調査と半構造化面接・振り返りシート記述と非構造化面接と参与観察を実施した。

質問紙は大久保・青柳 (2003) の大学適応感尺度 (居

心地の良さの感覚の11項目、課題・目的の存在の7項目、被信頼・受容感の6項目)と下山 (1992) の意欲低下領域尺度 (学業意欲低下因子の5項目)を用い、リッカート法で回答を求めた。なお、大学適応感尺度は5件法、意欲低下領域尺度は4件法で実施した。フィールドワーク経験者、未経験者の質問紙の回答結果をもとに、フィールドワーク実施前から実施後にかけての大学適応感と学業意欲の差を分析した。

半構造化面接は、フィールドワーク振り返りシートを使用し記述しながら実施した。内容は以下の3点である。1点目は、自分にとってのフィールドワークと座学の相違点、2点目は、今回のフィールドワークで座学に生かせる点、3点目は、フィールドワークを通しての情動の変容 (大学生生活・友人関係・学習意欲) である。フィールドワーク参加への認識の変化及び、それが大学生活への変化につながったのか検討し、質的变化を明らかにした。

また、第3者である保育士と施設職員に対して、非構造化面接方式でのインタビューをし、学生の子どものかかわり方、ふるまいの変化を尋ねた。参与観察では、フィールドワークでの学生の言動、行動、表情をカメラで記録した。これらの学生の姿から、1回性の保育の現象をありありと捉えようとする実践記録の方法論であるエピソード法 (鯨岡 2005) により多様な側面について分析、考察を行った。

1. フィールドワーク

調査場所：岡山県備前市 NPO法人 備前プレーパーク「森の冒険秘密基地」

調査時間：午前9：30~11：30

調査日：2017年10月6日、11月21日、12月5日、2018年1月5日、2月27日、計5回

活動内容：備前プレーパーク「森の冒険秘密基地」の園児と共に園のプログラムに添って活動する。

2. 調査のタイミング

調査項目、調査日はTable 1に示した通りである。9月の質問紙調査では、4年生8名対象で8名の参加、

Table 1 調査のタイミング

	9月20日 (フィールドワーク前)	10月6日	11月21日	12月5日	1月5日	1月20日 (フィールドワーク後)	2月27日
質問紙	3年生23名 4年生8名					3年生25名 4年生8名	
フィールドワーク		実施	実施	実施	実施		実施
振り返りシート (半構造化面接)		実施	実施				実施
非構造化面接		実施	実施				実施

3年生25名対象で23名参加だった。1月の質問紙調査では4年生8名対象で8名参加、3年生25名対象で25名の参加だった。フィールドワークは、2017年10月6日、11月21日、2018年1月5日、2月27日に実施した。半構造化面接・振り返りシート記述は、2017年10月6日、11月21日、2018年2月27日、第3者へのインタビューは2017年10月6日、11月21日、2018年2月27日、フィールドワーク終了時に口頭試問を行い、筆者がまとめた。

3. 倫理的配慮

本研究は実践と実態把握を中心に進めることから、質問紙調査をする前に、調査対象者に全員に対して研究の目的とデータの取り扱いについて、以下5点を口頭で伝えた。①データは統計的に処理され個人が特定されないこと。②研究目的のみデータを使用すること。③いかなる理由でも本人以外に個人のデータが開示されないこと。④データ提供の可否がいかなる成績評価にも影響しないこと。⑤いつでも研究参加を拒否できることである。提供を拒否する場合は、質問紙のチェック欄にチェックを入れるよう依頼した。また、備前プレーパーク「森の冒険秘密基地」の職員、保護者にも研究目的で映像の使用目的を明確に伝え許可を得るなど十分な配慮を施した。

III. 結果

本研究では質問紙調査、半構造化面接・振り返りシー

ト、非構造化面接、参与観察から得られた結果は以下の通りである。

(1) 質問紙調査

尺度の因子ごとに質問項目の平均値を算出した。その平均値をもとに、調査時期（9月、1月）とフィールドワーク経験の有無（経験者、未経験者）によるグラフを作成した（Figure 1～Figure 4）。

居心地の良さの感覚（Figure 1）では、フィールドワーク未経験者は変化が見られなかった。一方、フィールドワーク経験者は、9月より1月の方が、0.5数値が高くなっていった。フィールドワークを通して、居心地が良さを強く感じるようになっていった。

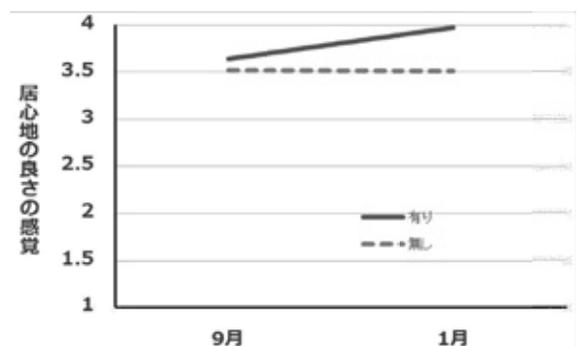


Figure 1 居心地の良さの感覚

課題・目的の存在（Figure 2）では、フィールドワーク未経験者と経験者とも、9月より1月の数値の方が高くなっていった。フィールドワーク経験者と未経験者

の数値の上昇度には、差が見られない。

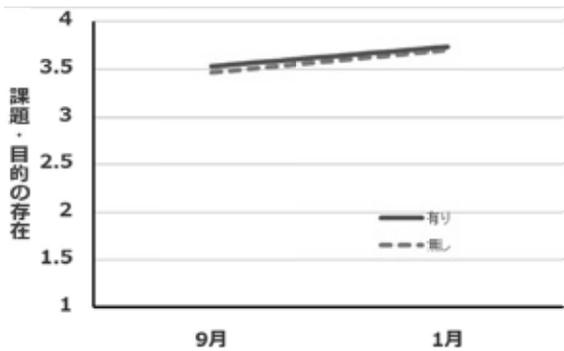


Figure 2 課題・目的の存在

非信頼感・受容感 (Figure 3) では、フィールドワークの経験の有無にかかわらず、9月より1月の数値が高くなっていった。フィールドワーク経験者と未経験者の数値の上昇度には、差が見られない。

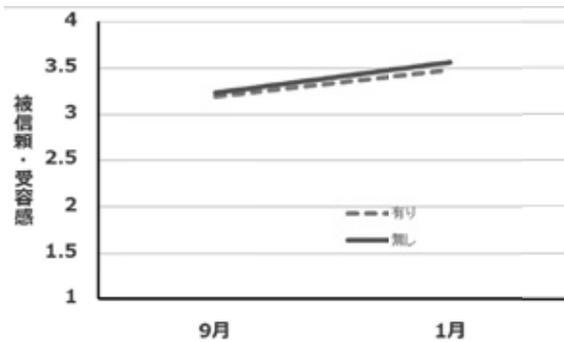


Figure 3 非信頼感・受容感

学習意欲低下 (Figure 4) では、9月の調査でフィールドワーク経験者の方が未経験者より学習意欲が高かった。1月の調査でも9月と同じ傾向が読み取れるが、フィールドワーク経験者の数値の方が高い。

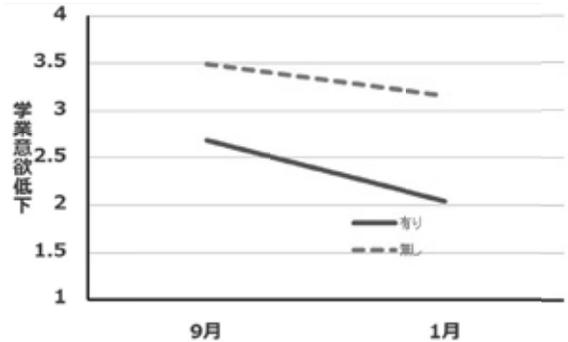


Figure 4 学習意欲低下

(2) 半構造化面接と振り返りシート

筆者が半構造化面接（振り返りシートに記載されている3項目について質問をする。）をしながら、参加者が振り返りシートを記述する方法で実施した。振り返りシートの記述内容を整理する際には、記述は異なっても意味合いが同じと判断した場合は同じくくりとして記載した。10月6日に実施した結果をTable 2、11月21日に実施した結果をTable 3、2月27日に実施した結果をTable 4にそれぞれ示す。

Table 2 10月6日実施

<p>1. 自分にとってのフィールドワークと座学の相違点</p> <ul style="list-style-type: none"> 子どもと遊びながら学ぶことができることは楽しい。 じっと座っていないでもよいので苦痛感はない。 一方的に講義を聞かなくてもよい。 自分で疑問点を捜すことができる。 自分で体験できることは、やりがいがある。 授業時間の感覚がフィールドワークだと短く感じる。 フィールドワークの方が学びにつながっていくような気がする。 子どもの姿を見ることができることは貴重な経験。
<p>2. 今回のフィールドワークで座学にかせる点</p> <ul style="list-style-type: none"> 初めての体験なので、よくわからない。 具体的なイメージはないが、いかせる気がする。 授業で子どもの様子を聞いていても、イメージしやすくなった（授業が理解しやすくなった）。 子どもの発達に関する授業にかせる。 子どもの遊びに関する授業にかせる。 ゼミ論文、卒業論文の執筆(データ取得)にかせる。 保護者の方が子どもと関わる様子を見ることができるので、保護者支援の授業にかせる。

<p>3. フィールドワークを通しての情動の変容 (大学生生活・友人関係・学習意欲)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大学生活には変化は感じない。 ・生活リズム（早起き）がよくなった。 ・久しぶりに友人と会い話をした（大学でも顔を合わすことが少ない友人）。 ・友人と学修について話をした経験はほとんどないが、フィールドワークの振り返りについては、自分から進んで友人に話しかけていくことができた。 ・子どもに関する授業に少し興味が出てきた。 ・ゼミ論文、卒業論文執筆に向かう気持ちが出なかったが、取りかかる気持ちが出てきた（きっかけづくりになった）。
--

Table 3 11月21日実施

<p>1. 自分にとってのフィールドワークと座学の相違点</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自ら動いたり、子どもと関わったりすることで座学より学ぶことが多い。 ・実際に子どもと関わることで、座学では気づかないことも気づくことが多い。 ・実践的に体験することは、学びにつながる。 ・子どもの違いを（特性）を理解しやすい。 ・子どもとの実際の関わりの中で、子どもの表情、言葉を目の前で見聞きすることができ、子どもの内面を理解しやすい。 ・自分が学ぶことだけではなく、子どもに危険がないか（何が起るかわからないので）注意が必要。
<p>2. 今回のフィールドワークで座学にかせる点</p> <ul style="list-style-type: none"> ・フィールドワークの体験を授業等で発表していくことができる。 ・フィールドワークの振り返りを、ゼミでディスカッションし課題等を見出していく。 ・子どものしていた遊びを、座学で学んだ遊びと比較できる。 ・授業で子どもの様子を聞いていても、イメージしやすくなった。 ・保育所実習事前指導、保育教職実践演習の授業にかせる。 ・ゼミ論文、卒業論文の執筆（データ取得）にかせる。
<p>3. フィールドワークを通しての情動の変容 (大学生生活・友人関係・学習意欲)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・積極的に友人と話すようになった。 ・フィールドワークと一緒に参加した友人と大学内、大学外でも一緒に過ごすことが多くなってきた。 ・友人だけではなく、フィールドに勤務している職員、来園している保護者等と話をするようになり、コミュニティが広がってきた。 ・授業に出席しようという気持ちが出てきた。 ・もっと子どもについて勉強をしようという気持ちになった。 ・子どもとの関りが増えたことで、以前より学習の意欲が高まってきた。 ・座学よりもフィールドワークのような参加型の授業に意欲が持てるので、参加型の授業には積極的に参加したいと思うようになった。 ・ゼミ論文、卒業論文の執筆のペースが、他の友人より速い気がする。

Table 4 2月27日実施

<p>1. 自分にとってのフィールドワークと座学の相違点</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子ども一人ひとりの成長や発達の差異について実感できる。 ・フィールドワークでは、子どもがいつ、どんな動きをするのか予測できないので、緊張感が違う。 ・長期的に子どもの姿を観察することができ、成長を感じることができる。 ・実際に子どもと関われるフィールドワークは、座学より充実感がある。 ・子どもと関わることで、子どもの内面（気持ち、感情）がよく分かる（座学ではできない） ・自分が動けば動くほど学びが多くなる。 ・子どもの行動、出来ること等の理解は、座学だとイメージしかできないが、フィールドワークだと詳しく知ることができる。
<p>2. 今回のフィールドワークで座学にかせる点</p> <ul style="list-style-type: none"> ・フィールドワークの体験をまとめて、関連授業等で学んだことと比較していくことができる。 ・実際に見た子どもの遊びを授業で再確認していくことができる。 ・①非認知能力の育ち②運動能力の発達③人間関係の構築について、自然体験活動をしている子どもと自然体験活動をしていない子どもを実際に調査することができたので、そのデータをゼミ論文、卒業論文執筆にかしていきことができる。
<p>3. フィールドワークを通しての情動の変容 (大学生生活・友人関係・学習意欲)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・積極的に友人と話をするようになった。 ・フィールドでは、自分たちが主体的に動ける活動が準備されていた。そういう活動を体験することで達成感を感じたこともあり、日々の生活でも主体的に動くよう心がけるようになった。 ・アルバイト先で、自分からさまざまな年齢層の人にも話しかけたり関わったりすることができるようになった。 ・友人と協働することの大切さを学んだ（フィールドの環境整備、製作）。 ・資格を取得していなかったが、改めて専門職に挑戦したい気持ちになった。 ・保護者、職員の方との関りで視野が広がった。

(3) 非構造化面接

筆者が、フィールドワーク終了後に備前プレーパーク「森の冒険ひみつ基地」の保育士と職員を対象にインタビューを実施した。インタビューの内容は、主に学生の子どもへの関わり方、ふるまいについてである。10月6日に実施した結果をTable 5、11月21日に実施した結果をTable 6、2月27日に実施した結果をTable 7に示す。

Table 5 10月6日実施

- ・参加学生全員が、森のようちえんは初めての体験だったので、戸惑っている様子がよく分かった。
- ・施設内を案内したときは、学生全員、興味津々の様子が見られた。
- ・プレーパークの理念として、誰でも自由にしたい遊びを自分の責任で楽しむということを掲げている。学生にも子どもたちの姿を見ながら、主体性の意義を学んでほしい。
- ・プレーパークでは、地域のコミュニティの場作りにも力を入れている。地域とのつながりの大切さを社会に出る前に学んでほしい。
- ・園の保育理念、目標、事業計画、施設の概要の説明に対しては、熱心に耳を傾けていた。
- ・子どもへの関わり方も、初めはぎこちなく戸惑いの姿が見られたが、時間の経過とともに表情が和らぎ楽しんでる姿が見られだし安心した。子どもと過ごすことが楽しいということを感じてほしい。
- ・今後の課題としては、自然の中での子育てのメリットについて学んでほしい。認可保育施設とは違う形での保育施設の在り方について学んでほしい。

Table 6 11月21日実施

- ・職員、保護者、もちろん子どもに対しても進んで挨拶をしたり笑顔で接したりしていた。
- ・挨拶の後には、主体的に施設内の環境整備に取りかかっていた。
- ・子どもへの関わり方にも変化がみられるようになってきた。具体的には、禁止、命令の言葉はなく、子どもの思いを大切にしながら関わっている姿が見られた。
- ・活動の最後に、今日の活動の子どもたちの振り返りをしてきた積み重ねの成果か、自然体験活動の意義も少しずつ理解している様子がうかがえた。
- ・自分のキャリアデザイン、大学での学習状況等の相談もしてくれるようになり信頼関係ができつつあると感じた。
- ・スタッフの補助として学生に安心して任せられるので、フィールドワーク以外に、アルバイトとして来てほしい。

Table 7 2月27日実施

- ・1年間のフィールドワークを振り返ると、当初は、意欲が見られなかったり自信がなかったりの姿が見られたが、回数を重ねるうちに顔の表情も変わり積極的に参加できるようになってきた。
- ・活動を計画する際に学生に分担も作るようにした。学生に全面的に任ずことで、責任感や主体性が育った。
- ・友人だけではなく、職員、保護者、地域の方とコミュニケーションをとることで、良好な人間関係の構築ができた。
- ・本施設で働きたいと就職先の選択肢にしてもらったこと、子どもと関わる仕事がしたいと再度考えるきっかけになったことは、フィールドワークに大きな意味があった。
- ・卒業論文、ゼミ論文執筆のための調査をすることにより、保育方針の理解、自然体験活動の教育的効果の理解が得られた。

- ・子どもは勿論、職員、保護者、本施設に関わる全てが、学生との出会いに、たくさんの学びがあった。
- ・今後もフィールドワークを継続してほしい。そして、さまざまな形の子育て支援拠点があることを知り、将来、何らかの形で役立ててほしい。

(4) 参与観察

筆者が、参与観察法を用いフィールドワークでの学生の言動、行動、表情をカメラで観察・記録した。これらの学生の姿から、エピソード法により多様な側面について分析、考察を行った。本事例は、その中でも学生の変容が顕著な活動を論じることとする。

事例1（お兄ちゃんと一緒に）

プレーパークに遊びに来た子どもたちは、次々に森の遊具へ走り寄っていた。その流れとともに学生も子どもの遊びに参加していた。横たわっている大きな丸太の上で遊んでいる子どものところへ行き一緒に遊び始めたA学生。一本の丸太でどんな遊びができるのか、子どもたちの思いを丁寧聞きながらも、遊びが楽しくなるように発展する言葉かけをしていた。(Table 8) 色々な遊びを試していたが、最終的にはじゃんけんをして勝ったら丸太の上を進む、負けたら丸太から降りて元に戻るという陣取りゲームに発展していた。

(Figure 5)

Table 8 子どもと学生をつぶやき

記録日：	天候：	対象：
10月6日	晴れ	学生・4、5歳児
<p>(子どもを見つけてかけよっていく。)</p> <p>学生：「ジャンケンポン、あっ負けた。」</p> <p>A児：「ジャンケンポン、勝った、勝った」</p> <p>学生：「負けた時、勝った時、どうしようか？」</p> <p>B児：「負けたら木の端に走って帰ったら？」</p> <p>学生：「そうだね。面白そう、やってみよう。」</p> <p>A児：「勝ったら前に進めるにしたら？」</p> <p>学生：「そうだね、早く木の端にたどり着いたら勝ちだね。」</p>		



Figure 5 陣取りゲーム

事例2（子どもたちが来る前に準備をしよう）

学生たちはプレーパークには、いつも子どもたちが登園してくる30分前に到着している。到着すると、職員の方は、遊具の安全点検、環境整備を行っている。前回は、「学生さん手伝って。」と言われてから、作業を始めたが、2回目（11月21日）は、大きな声で職員の方に挨拶をした後、自分たちで環境整備を始めていた。また、何をしたらよいのか、どんなふうにすれば子どもが安全に遊べるのかを、学生同士で相談しながら作業を進めていた（Table 9）（Figure 6）

Table 9 環境整備時の学生の会話

記録日：	天候：	対象：
11月21日	晴れ	学生
<p>学生B：「何したらいいかな？」 （二人で施設内を見回していた。）</p> <p>学生C：「この前、ナイロン袋に木の実を入れて遊んでたよ。」</p> <p>学生B：「じゃあ、ナイロン袋をきれいに洗っておくかな〜。」</p> <p>学生C：「そうだな。ナイロン袋を持って、水を入れていくから。」</p> <p>学生B：「わ〜水が冷たいな。でも、早くしないと子どもたち来てしまうよ。」</p>		

学生C：「そうだな。これがすんだら、園庭のはき掃除もしておこうかな？」

学生B：「子どもが怪我をしないようにな。」



Figure 6 環境整備

事例3（活動を考えよう）

1月5日のフィールドワークでは、学生主体の活動を展開した。対象は、0、1、2歳児とその保護者、10組20名程度、時間は10：00～11：00だった。備前プレーパークは、認可外保育施設の機能の他に放課後児童クラブ、利用者支援事業、子育て新拠点事業の活動も行っている。今回は、学生が一番取り組みやすいだろうと思われる子育て新拠点事業を任された。この活動に向けては、事前に大学で検討会をした。まず、座学で学んだ0、1、2歳児の発達を確認し、どんな遊びが適切かという話し合いをした。また、保護者と一緒に楽しめるということを視野に入れる必要もあったので、それに関する文献を図書館で調べた。当日までに自分たちで主体的に集まる日を設定して準備を進めていった。寒い時期であること、親子で触れ合うという視点から、園庭で体を十分に動かして楽しめるリズムあそびを計画した。そして、準備品、役割分担等、学生同士でしっかりと話し合いをして当日に臨むことができた。プレーパークとの調整も自分たちで進めていた。当日は、遊びの説明、展開、振り返りまで学生



Figure 7 活動の説明をする学生



Figure 8 職員にインタビューする学生

で進めた。(Figure 7)

子どもたち、保護者もリズムあそびを楽しんでいる姿が見られた。活動が終わった後、保護者から子どもの好きな遊びについて質問を受ける学生もいた。子どもたちからは、「お姉ちゃん、もう一回しよう。」というリクエストもあった。そして、最後は、子育て支援拠点事業担当の保育士と反省会を持ち、本日の活動の振り返りを行った。

事例4（卒業論文頑張ろう）

フィールドワークを重ねるうちに、卒業論文、ゼミ論文のテーマをプレーパークでの活動の中から見出すことにした学生が5名いた。5名とも就職先が警察、消防、役所と子どもにかかわる仕事ではなかったこともあり、当初、卒業論文のテーマ、関心ごとが見つからず卒業論文執筆にも前向きではなかった。しかしながら、フィールドワークに参加しはじめ子どもと関わる中で、卒業論文のテーマが見え始めたようだ。5人の卒業論文のテーマは以下である。①幼児期の自然体験活動と非自然体験活動の運動能力の差 ②自然体験の頻度が子どもの思考にどのような影響を与えるか ③自然体験活動を通して人とのかかわりを育む ④子どもの運動能力と自然体験活動の関係性について ⑤自然体験活動を通して育まれる幼児期の非認知的能力である。調査は、フィールドワークとは別日に自分た

ちで出かけていた。調査内容は、子ども活動場面の観察以外にもプレーパークの職員にインタビュー、アンケートを実施したりした(Figure 8)。併せて、学外の図書館へも出かけ、先行研究の論文、参考文献の検索をしていた。また、プレーパークに卒業論文の執筆業況を報告に行ったり、完成時にはお礼に行ったりし感謝の意を伝えた。

IV. 考察

本研究では、備前プレーパーク「森の冒険ひみつ基地」でのフィールドワーク（幼児との自然体験活動）を行った。一連の活動を通して、大学生の学業の意義と目的意識や大学生生活全体への適応感の変化を測定した。さらに、面接と参与観察によってアカデミックスキルズと生活スキルが、どのように変容するのかを検討した。

質問紙調査結果から、居心地の良さの感覚はフィールドワーク未経験者は変化が見られなかったが、フィールドワーク経験者は数値が上がっていた。同時に学業の意欲の数値もフィールドワーク経験者は、フィールドワーク未経験者より数値が上がっていた。Birch&Ladd (1996) は、好ましい学校への知覚や学校への感情をもつ子どもは、学校で居心地よさを感じやすく、教育の経験から学習や利益を獲得できるだろうと言っている。本調査においても、大学生にとっ

て、フィールドワークを経験することにより、学業の意義、目的を再確認でき、同時に大学生活にも適応できるようになったということが示唆できる。具体的には、半構造化面接と振り返りシートの記述、プレーパークの保育士、職員への非構造化面接、事例の結果から考察していく。特筆すべき点は、大学生活への適応感に友人との関係が大きく影響していると考えられる。半構造化面接と振り返りシートの記述でも、フィールドワーク参加当初から、友人と話をしたりする機会が増えてきたという記述が見られた。そして、友人との関係性がフィールドワークの会を重ねるごとに密接になっていっている変容が明確に見られた。この結果は、学校適応に友人関係が影響している先行研究（古市，1991 古市・玉木，1994 大久保・長沼・青柳，2003）と一致している。また、フィールドワークを座学に生かせる点についても、フィールドワークの回数が多くなるにつれて、具体的な授業と関連させての記述が多くなってきている。また、講義を受けながら、実際の子どもの姿をイメージできるようになったことから授業も理解しやすくなったようだ。座学での学びが実感できてきたのではないかといえよう。それと同時に、情動の変容についても、コミュニケーション能力が向上してきたことが伺える。その要因として2点考えられる。1点目は、友人だけではなくプレーパークの職員、来園する保護者、地域の方とかかわりを持つことで視野が広がったこと。2点目は、フィールドワークの振り返り、活動企画で友人とディスカッション、話し合いをする機会が多くなったことだと考えられる。他にも、主体性が身につけてきたことも挙げられる。プレーパークは、子どもの保育方針を含め主体的に動かなければならない、主体的に動く環境がある。大学生も主体的に動くことで、心地よさ感、達成感が得られたと言っている。そして、日々の生活の中でも主体的に動くことを意識するようになったということだ。つまり、能動的にコミュニケーションを持ったり、行動を起こしたりすることで自分の存在感を主張でき大学生活にも適応していったのではないかと考える。田中・菅（2009）は、学習意欲に関して

は、アイデンティティの確立、精神的自己、セルフ・エスティームを組み合わせていくことが有効とされている。フィールドワークでセルフ・エスティームを確立したことで、大学生活にも適応でき学習意欲にもつながっていったのではないかと考える。また、フィールドワークが、キャリアデザインを再考するきっかけづくりにも繋がったと考える。フィールドワークに参加した学生の中には、保育士資格、幼稚園教諭免許を取得していない学生もかなりの数を占めていた。明確なキャリアデザインを描けず、学習意欲の低下、大学生活の不応感をもっていた学生もある。しかしながら、フィールドワークを経験し、子どもと関わったりプレーパークの職員と話をしたりすることで、「やっぱり子どもが好きだから、子どもと関わる仕事に就きたい。」「プレーパークで働きたい。」など、多様な選択肢の中から就職を決めていくことができることを学んだ。自分の中に明確なキャリアデザインができたことは、学習意欲の向上につながったと考えられる。また、プレーパークの保育士、職員への非構造化面接からも大学生の学習への意欲の向上、子どもへの関わり方の変容、社会人としてのふるまいの変容の回答が得られた。学生が地域に赴き教育活動をすることは、アカデミックスキルズ、生活スキルの向上に寄与すると考えられる。

V. 総括と今後の課題

本研究では、フィールドワークが大学生の学業及び大学への適応にプラスの影響を与えることが明らかになった。本研究で実施したフィールドワークは、学生参加型、学生同士協働して活動課題を探求しながら解決していくプログラムだったことで、アカデミックスキルズも向上した。同時に生活スキル（汎用能力）の定義である、対人コミュニケーション能力、人間関係スキル、問題解決能力、意思決定スキル、人生の目的スキルも向上した。上述したことからアカデミックスキルズと生活スキル（汎用能力）は、Positive correlationが存在することが証左された。本研究において多くの成果を得ることができた。しかしなが

ら、調査対象者の人数が十分ではなかったため結果を一般化することは難しいと指摘できる。今後はさらに調査人数を増やして分析する必要があるだろう。また、本研究では、アクティブラーニングの一形態のフィールドワークで行ったが、互恵性のあるサービ斯拉ーニングを用いた研究を行い、比較を試みたいと考える。

謝辞

本研究にあたり、環太平洋大学 吉澤英里先生に多大なご助力をいただきました。

また、本論文執筆にあたり調査のフィールドを提供いただきました備前プレパーク「森の冒険秘密基地」の先生方、質問紙調査・面接への回答に応じて下さった学生の皆様に心よりお礼申し上げます。

注

1) 本論は、2018年9月、環太平洋大学 学内特別研究(藪田 弘美)「フィールドワークが大学生の学業及び大学への適応に与える影響について」poster sessionにおける論考を踏まえ、さらに考察を進める。

【引用・参考文献】

- (1) Birch,S.H.,&Ladd,G.W (1996) Interpersonal relationships in the school environment and children,s early school adjustment:The role of teachers and peers. In J.Juvonen&K.A.Wentzel (ds.), Social motivation:Understanding children, s school adjustment. Cambridge, UK/New York:Cambridge University Press.pp.199-225.
- (2) 古市裕一 (1991), 小中学生の学校ぎらいの感情とその規定要因, カウンセリング研究, 24:123-127
- (3) 古市裕一・玉木弘之 (1994), 学校生活の楽しさとその規定要因, 岡山大学教育学部研究収録,

96:105-113

- (4) 鯨岡峻 (2005), 「エピソード記述入門」, 東京大学出版会
- (5) 三ツ木真美・佐野愛子・澤田隆 (2017). フィールドワークによるアクティブ・ラーニングと学生の学びの認識, Journal of Hokkaido Bunkyo University,18:109-125
- (6) 溝上慎一 (2009), 正課・正課外のバランスのとれた活動が高い成長を示す, 京都大学高等教育研究, 15:107-118
- (7) 文部科学省 (2012), 「新たな未来を築くための大学教育の質的短観に向けて～生涯学び続け,主体的に考える力を育成する大学へ～」, 中央教育審議会 (答申)
- (8) 大久保智生き・青柳肇 (2003), 大学適応感尺度の作成の試み—個人—環境の適合性から, パーソナリティ研究, 12 (1) :38-39
- (9) 大久保智生・長沼君主・青柳肇 (2003), 学校環境における心理的欲求の充足と適応感との関連, Human Science Research, 12:21-28
- (10) 下山晴彦 (1995), 男子大学生の無気力の研究, 教育心理学研究, 43 (2) :145-155
- (11) 田中存・菅千索, 大学適応に関する研究—自己意識と対人関係の視点から—, 和歌山大学教育部紀要 教育科学, 59:1-8
- (12) 時任隼平 (2015), 高等教育におけるフィールドワーク実習のデザインに関する研究—山形大学基盤教育「フィールドワーク共生のものがみ」を事例として—, 山形大学高等教育研究年報, 9:27-32